

美濃陶磁歴史館だより

美濃陶磁歴史館
☎51245

企画展 「昭和、美濃の陶工 林景正」
と収藏品展「美濃桃山陶ってなんだろう」が同時開催。令和2年2月24日まで。

昭和、美濃の陶工 林景正

美濃古陶ブームで盛り上がった昭和初期のこのまちで、黙々と作品づくりに打ち込んだ陶工がいたことをご存じでしょうか。林景正は明治24年に泉村で生まれ、学校卒業後、家業の製陶業に従事し煎茶碗をつくる中でロクロの技術を磨いていきました。やがて、荒川豊蔵が志野の陶片を大萱で発見し志野、織部、黄瀬戸、瀬戸黒といった桃山陶が美濃で焼かれていたことが判明するのと機を同じくして、景正も美濃桃山陶の再現に乗り出します。志野、織部、黄瀬戸へと研究を進め昭和33年には黄瀬戸の技術において岐阜県重要無形文化財に認定されました。

本展では、景正が築窯した「乙塚窯」からの出土品や手ロクロなど景正の制作の様子がうかがえる資料のほか、黄瀬戸をはじめ志野や織部など初公開となる多数の作品をご紹介します。



林景正（昭和時代）



黄瀬戸水指（個人蔵）



鼠志野食籠（個人蔵）

カガクへのトビラ Vol.12

核融合科学研究所 / 総合研究大学院大学 ☎52222

「持続可能なエネルギー源を目指して～プラズマ・核融合研究のこれから」

今年に入り12回にわたりプラズマや核融合にまつわる科学のお話しをしてきました。いよいよ今回が最終回！私たちがどうしてプラズマの研究をしているかをお話して締めくくりたいと思います。

宇宙にある目に見える物質の99%以上はプラズマ状態です。星々の内部ではプラズマが核融合反応を起こしています。私たちは、宇宙で普通に見られるプラズマ・核融合を人類のために使うことを目指しています。日本では1958年、日本人として初めてノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士の提唱で研究チームが立ち上がり、プラズマを磁場で閉じ込めて保持する装置の研究が始まりました。装置には、らせんにねじれたコイルが用いられ「ヘリカル型装置」と呼ばれるようになります。その研究が京都大学、名古屋大学などで継承され、現在の核融合科学研究所の大型ヘリカル装置（LHD）につながります。

研究の最終目標は、プラズマ・核融合を発電に利用することです。まだ実現していませんが、発電に使うプラズマ生成の用途は立っています。LHDも一昨年、発電に必要な条件の一つである1億2,000万度の高温プラズマ生成に成功しました。順調に研究が進めば、発電を実証する装置が今世紀中頃に建設されるでしょう。そうすれば海水から燃料資源（重水素とリチウム）が採れる持続可能なエネルギー源となり、私たちは資源枯渇の危機から逃れられるはずで、そのためには研究・技術を若い人へ引き継ぐことも大切です。核融合科学研究所は国立大学法人 総合研究大学院大学を併設し、人材の育成にも力を注いでいます。引き続き市民の皆さんのご支援をよろしくお願いいたします。



大型ヘリカル装置(LHD)の全景

